

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2007年5月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



## 感情の論理 vol.3 「感情に思いを馳せる」

私が東京のホテルに宿泊したときのことです。初日の夜、同じフロアに泊まっている若い男女のグループが、夜中の12時過ぎに帰ってきて、廊下で大騒ぎを始めました。どうやら酔っているようです。私はまだ寝ていなかったのですが、(私は繊細で?ホテルでは4時近くまで眠れない。)あまり五月蠅(うるさ)いので、廊下に顔を出して、お願い(一喝?)しました。

「静かにしてください!」

その日はそれで静かになったのですが・・・翌日、再び夜中に騒ぎ始めたのです。今度は、どうやら一つの部屋に集まって、宴会の続きを始めたいらしい。一日仕事(セミナー)を終えた後だったので、今日は寝たい。さすがに、温厚な?私も切れました。フロントに降りて、別フロアの部屋を要求すると共に、「安い民宿じゃあるまいし、あんな客を受け入れるな!」と苦情を言って、新しい部屋に入りました。ほぼ満室だったらしく、新たに用意された部屋は、寝るだけにはもったいない広さです。時間は2時を過ぎていました。「ようやく眠れる」と、ベッドでウトウトしかけたところに電話が鳴ります。フロントマスターからでした。

「ご迷惑をお掛けしました。新しい部屋はスイートで、本来〇万円のお部屋ですが、差額の料金は要りませんので…」

その恩着せがましさに・・・ブチ切れた。

「ふざけるな。やっと寝かけたところを起こして・・・差額の料金どころか、今夜の部屋代を払うつもりはない。明日、フロントで待っている!」

翌朝、チェックアウトのためにフロントへ行くと、フロントマスターが飛んできました。

「キーを2つお持ちだと思います。私がお預かりします。手続きは必要ありません。」

結局、昨晚どころか2泊分の宿泊費と食事代がタダになってしまいました。それでも、二度とこのホテルに泊まることはないでしょう。もっとも悪いのはホテルではなく、「客」です。ところが、対応を誤ると怒りが「店」向いてしまうという典型的な例です。

実は、同じことが塾の現場でも頻繁に起きています。例えば、授業中に騒いで勉強の邪魔をする生徒がいたとします。最近の若い講師は怒られたことがないため、「怒る」ことが苦手で、静かにさせることができません。また、その場で事を荒立てるよりはと、「後で保護者に電話するから」と言って、対処を遅らせる塾長もいます。もちろん、悪いのは生徒本人です。しかし、他の塾生は、塾の対応を見ている。

真面目な生徒は、「ああ、この塾は私のための塾ではない。」と思って、退塾していきます。結果、学習意欲の低い生徒ばかりの塾が出来上がります。そんな塾は当然、良い評判を作ることが出来ませんので、塾生数はみるみる減少していきます。

以前、「熱心な塾ほど真面目な生徒が退塾していく」という話をしたことがあります。熱心な先生は延長授業、呼出授業、補習授業を頻繁に行ないます。それは悪いことではないのですが、ややもすると対象となる生徒が「成績不振者」に偏る傾向があります。

「宿題を忘れたから居残りなさい。」

「欠席が多くて予定の学習が終わっていないので、土曜日に補講に来なさい。」

こうしたことを続けていると、やはり真面目な生徒は思います。

「この塾は、よくサボったり宿題を忘れてくる生徒には熱心で、私のように真面目に通っている生徒には手を抜いている。ここは私のための塾ではない。」

ところが、熱心な先生ほど「この不真面目で成績不振の子を俺の力で変えてやる!」と、ますますのめり込んで行きます。大多数の経営者が、「真面目で成績の優秀な生徒を集めたい。」と希望しています。理由は、「そうした生徒は手が掛からないから」です。そして、文字通り優秀な生徒に手を掛けなくなってしまいます。この「悪循環」が「低レベルの生徒が集まる塾」を作る大きな原因です。

どうか、生徒の感情に思いを馳(は)せてください。それは「騒いでいる生徒」の感情だけではなく、あなたの対応を見ているその他の生徒の感情にも。「一人の客」が原因のトラブルでも、「店」の対応を見ている、「その他大勢の客」がいることをお忘れなく。

今月の気になるハナシ

## dwarf planet = ?

創刊号で取り上げたのは、「冥王星」の降格?問題についてでした。昨年の8月に惑星の定義が決定され、“惑星ではない”という決定を下された冥王星。その冥王星を含む新分類“dwarf planet”など、英語表記のままになっていた部分の「和名」が決まるなど、進展がありましたので、お伝えします。

## 1. 冥王星は、惑星ではなく

まず“dwarf planet”の和名は、今まで使用の多かった「矮惑星」は、推奨されません。「矮惑星」は、直訳的仮訳ではありますが、小惑星より大きいのか、小さいのか、わかりにくいためかもしれません。

今回“dwarf planet”の和名は、『準惑星』を使用するように、推奨されています。「惑星より小さいが、小惑星より大きく、自己重力で球形をなす天体」という“dwarf planet”の概念には、ふさわしい和名と思われます。

ただし、検討委員会によると、「“dwarf planet”の判定基準にあいまいさがあり、これを1カテゴリーとして残すには、概念や定義の更なる検討が必要」という認識があるようです。つまり、「“dwarf planet”という分類は好ましくないが、やむを得ず使う場合は、『準惑星』を使いましょう」ということのようにです。

その他の分類名では、小惑星や彗星のグループの“small solar system bodies”は、「太陽系小天体」という和名を推奨しています。太陽系の中で、海王星より外側の天体は、「太陽系外縁天体」を推奨するということです。また、太陽系に関することが明らかな場合は、「外縁天体」としても良いようです。

さらに、「太陽系小天体」に関しては、定義の中に、「準惑星を除く」という表記があるため、準惑星の概念をはっきりさせなければ、どういうグループなのか判断できないと述べています。

そして、今回の提言で『準惑星』という用語・概念は、『高校までの学校教育に必要なレベルを超えるものであり、当面の間、学校教育や一般社会では、積極的に使用すべきではない』

としています。

それを踏まえて、教科書はどうなっているかというと…

## 2. 消えるか・残るか冥王星

今回、東京書籍・学校図書・啓林館の3社が出版している中学理科の教科書訂正を確認したところ、もちろん、惑星としては紹介されていませんでした。(惑星の総数は、「水・金・地・火・木・土・天・海」の8つ) 図表なども、冥王星の部分のみ削除されるなど、扱いは小さくなっています。

ただし、“冥王星という天体が存在する”ことは確かですから、「2006年の8月に、惑星の定義が決められ、冥王星は惑星からはずされ、惑星は8つになった」と注記され、名前は残っています。「教科書に載っていない = 冥王星はなくなった」という誤った認識を生徒に与えないために、冥王星に関する記述は、できるだけ残すべきというのが、出版各社の考えのようです。

あくまで、推測ですが・・・冥王星が今後、惑星に復帰することはないでしょう。しかし、「準惑星」という新しい分類の代表格として、その存在は、依然として残っています。今後、学習指導要領の変更や、新しい定義の確立などによって、「冥王星」を、教科書に記載しなければならない・・・かもしれません。

そうなると、今回冥王星の記述を全て削除してしまうと、記載→削除→記載となり、冥王星を知らない(習わない)世代が出てきてしまいます。

「ゆとり教育」→「総合的学習」→「発展的学習」と、2転3転する現在の指導方針では、大幅に変えたくないというのが出版各社の隠れた思いなのではないでしょうか。